

◆柔道場でイタリア人の若者に色々教え始めて、少し変化が出てきた。イタリア人は時間にルーズであると云われる。一般に正しいと思う。道場の連中もそうだからだ。4時30分から稽古開始と云っても、5時からが普通だ。最初は、この調子だったが、私が稽古開始15分前には道場について、人が居ようが居まいが時間通りに稽古を始めるようになると、かなり時間通りに来る者が増えてきた。別に束収を受けているわけではないので、遅れて来た者にはその日のメニューの最初からさせ、当然最後の方の新しいことができなくなるが、お構いなしに稽古を進める。そうこうするうちに、遅れたら新しいことができなくなり、次回に繋がらなくなるということが分かってきたのか、最近は時間通りに、あるいは5分位の遅れで始まるようになった。特に時間通りに来ないことで彼らイタリア人の間でも有名だった一人の若者が、未だに遅れて来るが、必ず遅れる時は私に電話を入れるようになった。〇〇で遅れます、いま〇〇にいるのであと10分で着きます、などである。もちろん遅れたわけだから、特別扱いはしていないが、彼も徐々に時間を守るようになりつつある。このルールは、たとえ道場の師範が遅れた場合でも、関係なく実行している。彼らは当初驚いていたようだが、中には真面目な者もあり、そのようなものにとってはとても良いらしい。合理的な理由がない限り、この方式は変えないでおこうと思う。



ネプチューン像のある場所は、Piazza del Nettuno(ネプチューン広場)という。

◆今日は **funerale**(葬儀)だ。道場仲間の母親が亡くなったのだ。日本だと、誰に連絡するかなど、残った家族たちが色々考えるが、こちらでは、極めて身近な人たちだけに伝えられ、彼らが自分の判断で他の人に伝え、さらに伝播されるという方式らしい。私も又聞きで参加した口だ。でも道場仲間では親族関係を除いて5名だけの参列であった。日本的感覚だと少ないかな、と思うのだが、こちらでは別にそれでいいらしい。葬儀の方式はカトリック教会の中で行われたが、見た目の形式こそ違おうが、行っている内容は仏式と同じようだった。お経の代わりに聖書が音読されたりだ。考えてみれば宗教が異なっても、死者の弔いが普遍的ならば、ある程度内容が同一化するのも自然であろう。生まれて初めて教会での葬儀を経験することができた。今後はないであろう。



白い雪、青い空、ピンクの教会でした。

その帰り、一台の自動車に女性 1 人男性 4 人で乗っていた。降りる場所まで約 45 分。その間、一人の女性が延々とおしゃべりをし、他の男性たちは黙々と、ときどき相槌を打ちながら、聞いているのだ。20 代の女性の、私からすると下らない世間話を、大の大人の男性が静かに耐えるように聞いている。で、一番の年配者に、イタリア人女性は家庭でもこうか(おしゃべりか)?と聞くと、他の男性全員一斉に、si(yes)、その通り!と。それを聞いた彼女は、私に振りむき、私は家では「もっとおしゃべりよ!」っと言いつつ放ったのだ。イタリア語のリズムで延々と聞かされるおしゃべり……男性は憩いの時間を求めて bar に頻繁に通う、理由の一端が解明された。私には耐えられそうも無い。やはり日本人女性が一番だろうとこのとき思った。

◆一年近くも住んでいると知り合いも多くなり、色々な情報も入ってくる。今まで子供もいて夫婦だと思っていた coppia(カップル)が実は事実婚だったり、である。なぜかと聞くと、これには多数の説明が入り乱れているが、まず、一度法律上の結婚をすると離婚が非常に面倒である(カトリックの影響であろう)、次に子供ができてしまった(incidente=事故)のでとりあえず一緒に暮らしている、結婚という行為に魅力も重要性も感じない、といったところであろうか。もちろん相思相愛の者同士で法律上の結婚をきちんとしていものも多い。でも私の周りの情報だけから判断すると、まず「愛」があるのではなく、何らかの要素、例えば見た目がカッコイイあるいは美人だ、お金がある、何となくフィーリングが合う、酒の勢いでついつい、などなどが意外と多いような気がする。そして暫くすると、相手の欠点が目につき、もともと相手に対する「愛」など希薄なのだから、すぐに別の相手に乗り換える、ということになるようだ。私が受けてきたこれまでの教育からすると、何という軽薄な連中なのだろう、と思わざるを得ない。つまり極めて偏見に満ちて要約すると、この国には基本的に「愛」はなく、カッコいい言葉で云うと「独立した個人」同士の争いが頻発する社会なのである。そう思うと、古典的な経済学の需要供給である。愛のない所に愛を説く宗教が広がり、争いばかりの所に細々としたルールができ、平和を声高に主張する。なんて云うことはない、ただの混乱した社会なのだ。友人のイタリア人達自身も、この国は渾沌として混乱していると認めている。ゆえに移民たちも入りやすいのだろうし、公よりも個人の人脈が頼りになるのであろう。個々人は愛すべき人たちだが、この社会と国は、全く魅力に欠ける。ようやく分かったような気がする。もちろん反論は山ほどあるであろうが、これはあくまで私個人の考えでよいし、万人に認めてもらおうなどと最初から考えていない。

ただ面白いのは、宗教の影響か、あるいは言葉で表さなくてはいけないという社会習慣なのか、個人的に色々質問すると意外と正直に明確に答えるのだ。確かに私と個人的に親しい関係になった者にしか、突っ込んだ質問や答えづらい質問はしないが。女性にしても、日本人だと絶対に口にしないような事柄まで、はっきりと答えてくれる。その内容は超々々々プライベートなことなので、一切書くことはできないが。これはイタリア人の愛すべき点であろうか。それとも私が信頼されている?からなのだろうか。

◆昨年 4 月に今の住居に入って、つい最近まで全く存在理由の分からなかったモノがあった。99 チェンテージミ(日本で云うとすべて 99 円の店)に行ったら、それが売っていた。最初は良く理解できていなかったが、自室のドアの取っ手に、取り付けられているのを思い出し、ようやく

その使用方法を理解できた。



ショップで購入



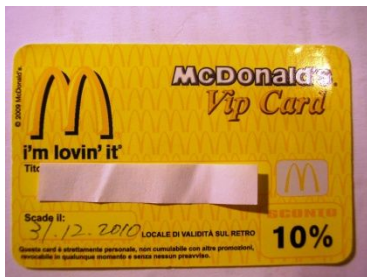
ノブに取り付け



壁を保護するストッパー

日本だと床にドアと壁が接触しないようにする突起が取り付けられているが、これは実に簡潔明瞭で、ドアノブに直接はめて、終了である。見た目を気にしなければ充分だろう。日本で使用しようと思い、合計4つを1.98€で購入した。

その帰り、いつもの **due torri** 近くのマクドナルドに行くといつもの顔見知りの **commessi**(店員)たちがいて、店の責任者もいた。私の友人がこの店に働いていることもあってか、皆非常に愛想がよい。そうこうしているうちに、何やら黄色いカードを貰ってしまった。よく見ると **Vip Card** と書いてあるではないか。何かと思っていると、要は購入商品の **10% sconto**(値引き)券であった。



2010 年末まで有効、系列店(2 店)のみで使用可能。

それほど頻繁に通っているわけではないが、これが人間関係の社会なのだろう。私の友人の、この店における存在の大きさが反映されたと思う。ありがたいが、あまり使用しないようにしよう。なにやら品性に関係してしまうような気がしていならないからだ。

◆悲しい知らせが届いた。私の恩師の訃報である。昨年、93 歳で他界したというのだ。私の記憶だと 95 歳のはずであるが、ご家族がそういうのだから私の方の間違いであろう。私が能天気な年末だの **capodanno** だの言っているときに、すでに亡くなっていたのだった。そうとは知らず、ボローニャから年賀状など送ってしまった。約束を果たせなかった後悔が残っている。いつも暑中見舞いと年賀状には、近々面会に行きます、と書いていたのだったが、入院直後に二回ほど面会に行っただけで、それはもう相当に昔のことだ。とうとう約束を果たすことなく、この日が来てしまった。あとは墓参りに行くしかない。

私の恩師は、学界における力は皆無であった。でも箸にも棒にもかからない私を、大学院の入試で拾ってくれた。今から思えばこれだけで、ありがたく十分である。最初は、私のあまりの勉強不足に驚きを隠すことができなかったようだが、見捨てることなく、コツコツと指導してくださった。私が修士課程に入学して最初の指導日に、今にして思えば恥ずかしく、かつ大胆であっ

たが、修士論文のテーマも決まっていなのに、博士論文を書きます!と断言したとき、フフンと鼻で笑いながら、一言、書けるものなら書いてごらん、といわれた。無知な私は、それなら書いてやろう!などと勝手に思いあがってしまい、書けるものだと勝手に思い込んでしまったことが、つい昨日のように思い起こされる。

それから具体的な指導というものはほとんどなく、指導日になれば、大学ではなく自宅(東京・根津)近くの喫茶店で待たされ、コーヒーを注文しておくように云われた。夏のある日、言いつけどおりアイスコーヒーを注文したが、待てど暮らせど先生は来ない。2時間40分後、ついに喉の渇きに耐えられなくなり、アイスコーヒーを飲んでしまった。その直後、先生がやってきて、一言、君は恩師が来るのを待てなかったのか!と云い放つと、またちょっと用事があるから、待っていなさい、と云い帰宅してしまった。それから約1時間40分後、先生が来て、一言、こんなに長く待っているのに君は何も注文しなかったのか、何か頼んでいればよかったのに、といい、アイスコーヒーを二つ注文すると、何やら先生の書いたエッセイらしき手書原稿を渡され、これを校正しておくように、といい15分くらいその話をして指導(?)は終了。これが修士課程2年間と博士課程4年間(1年在籍延長)の間、続いたのである。要は手ぶらであってはいけないということだ。勉強は自分でするもので、その結果分からないことがあれば先生に質問する、という方式だったのだ。

大学院に入学して、初めて明確な指導をされた内容は、①ガールフレンドをつくるな、②アルバイトをするな、③友達をつくるな、であった。①は人生の中でこれから研究に没頭しなければならない期間に入るのに、異性に現を抜かす余裕などなく、もしそんなことをしていたら研究などできないという理由であった。これを守れず、結局論文をかけずに終わる者も多かったという。②は、院生になれば家庭教師や試験監督など、意外と収入源が多くなるが、その分時間がなくなるということだ。特別な天才でもない限り、私のようなもともと勉強不足の者が、さらに勉強時間がなくなればどうしようもない。③は、異性ではないが、やはりコンパだとか何だとかと誘われて、間違った情報や悪意のあるうわさ話などを吹き込まれ、研究を諦める者もいたらしいので、そのことを心配してくれたのだ。そして一所懸命勉強していれば、同じレベルの同じ志のものは自然に集まるから心配ない、とも言われた。単純な私は、頭からこの指導を信じ切って、実行した。特に①は努力する必要などない。最初から誰もいないのだから。その結果、睡眠時間8時間、三度の食事や入浴など含めて1時間、残り15時間を色々な方法ですべて勉強に費やした6年間であった。もちろん私の基礎知識が極めて不足していたので、ここまでしなければならなかったが、そのおかげで今がある。

先生の書いた本を読んでも、さっぱり内容が分からなかった。文明論や文化人類学や、その他の非法律学の分野が盛り込まれていたからだ。そこでいろいろと質問すると、一言、君は何回読んだのかね?、3回は読みました、フッ、たった3回か、それで分かるわけないよ、もっと繰り返し読みなさい、である。で10回目くらいになると、ようやく分かるようになった。というよりも分かる所と分からないところが明確になったという方が正しい。そこで分からない所を質問すると、君はこの部分に関係した本を読んだのかね?、いいえ…、じゃあこれを読みなさい、と

云って書棚から本を渡される。このような事の繰り返しであった。先生の教え方である。

それから戦後日本で初めて、戦時国際法の分野を教科書に書き込んだ時の緊張したことや、文化政策の書籍を公刊したが、ボクの研究は 20 年早かった…と呟いていたことなど、あるいは先生が引っ越した(東京・富士見町)後に、自宅近くの神楽坂にあった鰻屋にお供したり、シャンソンの店で日本語発音のシャンソンを堂々と歌うのを聞かされたり、三味線の師匠に弟子入りしたことや、先生の大著(博士論文)の出版のお手伝い(校正)をしたり、色々と思い出がわき出てくる。それらは、この「ボローニャにて」とは無縁なので、これ以上書くことはやめよう。最後に、先生のご尽力で、大学院 6 年目にして博士号を取得できた。甲博第壱号であった。とても悦んで下さった。あの笑顔は終生忘れられない。

◆帰国まで約 30 日となった。もう研究の方は time up である。いまは柔道場の 3 名に、それぞれ武州伝気楽流の棒術、二天一流山東派古伝の小太刀、直猶心流剣術を一通り教えたら、私的な証明書(certificato)を出してあげようと思っている。あくまで私的な文章で diploma(免状)ではないので、その名称をどうするか迷っている。単に証明書では芸がない。今のところ「授技証」にしようかと考えている。とにかく基本の技(わざ)だけは授(さずけ)た、という意味である。その他のことはもう時間がない。でも私が色々、Che cos'è il Kata?(形とはなにか?)や Il Kata è utile?(形は役に立つのか?)などの文章を、下手なイタリア語で書いて配布したりしていたせいか、興味を持つ者が出てきたのだ。また彼らは、柔道の段位制度に少し嫌気がさしていることもある。何年たないと次の段には上がれないとか、色々とおもしろい。とにかく墨と筆と硯を手に入れ、日本語の毛筆書きで出そうと思っている。毛筆など下手の極みだが、イタリア人には分からないだろう。とにかく一通り教えなければならない。このことで頭がいっぱいである。



購入した硯、墨、筆。美術用具店で売っていたのを見つけた。

◆また訃報が届いた。誰が他界したかというと、私がイタリアに向けて出国した後、我が家のちびっ子たちが寂しいと云って一家に加えたハムスターのパールである。パールとはこのハムスターに付けた名前でお父さんの代わりにと一家に加わったのであった。私としては、父親たるものの代わりが小さなハムスターごときか、つと思うと、自分の存在の小ささに愕然としたのだったが、そのパールが体調不良を起こして先日亡くなったというのだ。慰めようと思ってちびっ子たちに、お父さんがもうすぐ帰国するから、自分の役割はもう終わったと思ってパールは天国に行ったのだよ、と、まるで童話のような話をしたら、えっ病気で死んだんだよ、という極めて現実的な返答であった。でも小さな命がなくなったことで、泣いていたというから、逆にホッとしている。身近なものの死をパールは教えてくれたのだろうと思い、異国の地から感謝の念を送った。彼は庭の梅の木の根元に葬られたという。

(続)